

長田夏樹氏の契丹語ノートなど

—契丹原字音価表—

吉池孝一

1. 序言

ここに故長田夏樹先生の大学ノート一冊がある<sup>1</sup>。表紙には“契丹語ノート V大金皇帝經略郎君行記 IV興宗仁懿皇后哀冊”とあり、中には契丹小字と漢語訳と小字の音価が記されている。さらにノートの初頭と末尾には、書き込みのある背紙や図表など、大小さまざまな紙片が挟み込まれている。それらのうち、今回は『KOTONOHA』103号において契丹原字出度表を紹介した<sup>2</sup>、今回は契丹原字音価表を紹介する。

2. 契丹原字音価表の色分け

「契丹語ノート」と書かれた大学ノートに契丹原字の音価表が一枚挟み込まれていた。表に題はない。いまこれを「契丹原字音価表」と名づける。

A 名	CA	OUR 谷	I	WAN	ME	O	QUN	SA 今	TAI	YAR
AD 坐	CE 木		IN	KE	MI	OL 重		SU 共	TAN 心	YAN
AR 余	CI 礼	E 穴	IR	KI	MU 土	OR	RA	SI		YE 化
AL	CIN	ED		KO			RE	SIG	U 令	YEN
			JA	NA		QA 外	RI 互		UD 笑	
BA 列 並	DA 及	GAI	JAR	LA 木	NE	QAI	RO	TA 今 ち	UI	
BI	DE 谷	GE	JE	LE	NI 支	QAR	RU 並	TE	UL 冬	
BO	DO	GEN	II 今	LI 片	NO	QO	RUN	TEN 巾	UN	
BOL 奴	DU	GI 升	JIU 当	LIQ	NU 利	QU 斤	丸	TU 舟		
BU 仕	DUN 的	GU	JU	LU 早 支		QUI 勿	S	TUR	YA 月	

<sup>1</sup> 平成 23 年 1 月末、故長田夏樹先生の契丹語と女真語の研究に係わるノートやカードなどを長田家よりお寄せいただいた。長田夏樹氏はこの方面における研究の先駆者の一人であり、ノート類は契丹文字と女真文字の解読の経緯を明らかにするうえで得がたいものとなるはずである。まづもって遺品の使用をお許しくださった長田家の皆様感謝もうしあげる。これらについては斯界共通の資料とすべく順次紹介をさせていただく。

<sup>2</sup> 吉池 2011b。契丹原字出度表は、61 種の契丹原字につき、道宗哀冊と宣懿皇后哀冊における詞頭・詞中・詞尾・単独の出度数と出現比率を記した表である。なお 61 種の契丹原字中、鉛筆で音価が記されたものが 33 種ある。

1行20字が10行となった縦長の原稿用紙を二枚張り合わせ、1行を38字としたものを横に使用して音価を示すローマ字(大文字)を示し、その右に契丹原字を墨書する。ローマ字は判子によったものようである。ローマ字と契丹原字には五色の色鉛筆により○が施されている。五色の色分けについては本表の左上に説明らしきものがある。

(契)

101- (赤) 91-  
 51-100 (橙) 51-90  
 31-50 (緑) 31-50  
 21-30 (青) 21-30  
 (紫) 10-20

(契)とある右側の数字は、道宗哀冊と宣懿皇后哀冊における詞頭・詞中・詞尾・単独の契丹原字の出度数の合計である。それは『KOTONOHA』103号において紹介した契丹原字出度表の数字にほかならず<sup>3</sup>、下に提示した契丹原字音価表の契丹原字がこの色で丸く囲まれている。左側の数字はおそらく中世蒙古語資料である『元朝秘史』あるいは『甲種本華夷訳語』における音節の出度数であろう。下に提示した契丹原字音価表の音価の部分がこの色で丸く囲まれている。もっとも、このような比較が意味をもつためには、契丹文と中世蒙古語文の分量がほぼ等しくなければならないが、中世蒙古語資料のどの部分を利用したかという点については不明とするしかない。

### 3. 契丹原字音価表

契丹原字音価表中の契丹原字を{ }で括り、清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 中の文字番号で原字を示し、本表を翻字すると次のようになる。ローマ字の前の通し番号は仮に付したもので元の表にはない。右に『KOTONOHA』103号において紹介した契丹原字出度表の情報を参考のために付した。

契丹原字音価表	契丹原字出度表
01. A(赤) {28} (橙)	a
02. AD {356} (緑)	'ad

<sup>3</sup> 契丹原字出度表によって No. 01 {28} の出度数の合計をみると 57 であり、これは契丹原字音価表の橙に相当する。そこで契丹原字音価表をみると {28} は橙でマークされており、両者が対応していることがわかる。同様に No. 02 {356} は 36 で緑に相当、No. 05 {151} は 77 で橙に相当、No. 08 {283} は 25 で青に相当、No. 09 {224} は 33 で緑に相当、No. 11 {162} は 106 で赤に相当、No. 12 {235} は 40 で緑に相当、No. 14 {131} は 111 で赤に相当、No. 15 {254} は 42 で緑に相当、No. 18 {152} は 59 で橙に相当、No. 19 {341} は 84 で橙に相当、No. 20 {340} は 57 で橙に相当する。いま No. 20 までの 12 例によってみたわけであるが、契丹原字出度表の出度数と契丹原字音価表の色分けが対応していることは間違いのないことである。

03. AR	{246} (紫)	原字無し
04. AL		
05. BA (赤)	{151} (橙) {53}	{151} ba, {53} 原字無し
06. BI (橙)		
07. BO (緑)		
08. BOL	{283} (青)	音価無し
09. BU	{224} (緑)	bu
10. CA (緑)		
11. CE (緑)	{162} (赤)	či と če を併記
12. CI (橙)	{235} (緑)	音価無し
13. CIN (緑)		
14. DA (赤)	{131} (赤)	da
15. DE (橙)	{254} (緑)	de
16. DO (緑)		
17. DU (橙)		
18. DUN (緑)	{152} (橙)	dun
19. DUR (橙)	{341} (橙)	dur
20. E (赤)	{340} (橙)	e
21. ED		
22. GAI (緑)		
23. GE (赤)		
24. GEN (青)		
25. GI (緑)	{90} (緑)	gi
26. GU (橙)		
27. I (赤)		
28. IN (緑)		
29. IR (橙)		

30. JA(橙)		
31. JAR(緑)		
32. JE(青)		
33. JI(青) {245}		原字無し
34. JIU(赤) {361} (橙)		ju
35. JU(青)		
36. KAN(緑)		
37. KE(赤)		
38. KI(青)		
39. KO(緑)		
40. LA(橙) {112} (橙)		la
41. LE(赤)		
42. LI(緑) {218}		原字無し
43. LIO(緑)		
44. LU(橙) {366} (橙) {208}		{366} lu, {208} 原字無し
45. ME(緑)		
46. MI(青)		
47. MU(青) {66}		mu
48. NA(緑)		
49. NE(橙)		
50. NI(橙) {144} (橙)		ni
51. NO(緑)		
52. NU(橙) {140} (赤)		nu
53. O(橙)		
54. OL {14}		原字無し
55. OR(青)		

56. QA(赤)		{261}(赤)	γa
57. QAI(橙)			
58. QAR(青)			
59. QO(橙)			
60. QU(橙)	{20}(橙)	{334}(赤)	{20}qu, {334}(qa) γu
61. QUI(青)	{168}(紫)		原字無し
62. QUN(青)			
63. RA(緑)			
64. RE(緑)			
65. RI(赤)	{196}(青)		ri
66. RO(青)			
67. RU(緑)	{51}		ru
68. RUN(橙)			
69. S(橙)			
70. SA(赤)	{244}(赤)		sa
71. SU(赤)	{339}(橙)		su
72. SI(緑)			
73. SIG(緑)			
74. TA(緑)	{247}	{98}(緑)	{247}原字無し, {98}音価無し
75. TE(赤)			
76. TEN(青)	{288}		ten
77. TU(赤)	{311}(橙)		tu
78. TUR(青)			
79. TAI			
80. TAN	{273}(青)		tan
81. U(赤)	{247}(橙)		u
82. UD(緑)	{205}(青)		ud
83. UI(青)			
84. UL(橙)	{33}(青)		ul

85. UN(緑)

86. YA(橙) {189}(赤) ya

87. YAR(青)

88. YAN(青)

89. YE(橙) {236}(青) ye

90. YEN(橙)

\*契丹原字出度表にあり、契丹原字音価表にないもの：20. {222}n

#### 4. 結語

今回紹介した契丹原字音価表は、前回紹介した契丹原字出度表の成果を利用して色分けした部分を含むことよりみて、契丹原字出度表に次いで作られたものとして大過ない。契丹原字出度表の作成時期は 1952 年の秋頃であり<sup>4</sup>、契丹原字音価表もその頃のものであろう。そして、契丹原字出度表と契丹原字音価表の両者は、『慶陵』（京都大學文學部 座右寶刊行会。田村實造・小林行雄著。上巻は 1953 年 3 月刊行）末尾の「接尾語として用いられた契丹文字の類別表」を作成する基礎資料とみることができる。さて、「接尾語表」の作製にあたって『慶陵』に次のようにある。

われわれは『元朝祕史』および甲種本『韃靼館譯語』の各音節頻度表と、興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后の四哀冊文にみえる契丹原字の頻度表とを比較対照するとともに、別表にかかげた契丹語接尾語と、中世蒙古語の接尾語を照合して、すでに數十個の契丹原字の音価を推定することができた。(265 頁)

この記述によると、中世蒙古語と契丹文の音節出度数などを照合して契丹原字の音価を定めたように読める。そこで、契丹原字音価表の一部を確認すると次のとおりである。

01. A(赤)	{28}(橙)	a
02. AD	{356}(緑)	'ad
03. AR	{246}(紫)	原字無し
04. AL		
05. BA(赤)	{151}(橙) {53}	{151}ba, {53}原字無し
06. BI(橙)		

No. 01 の {28} と No. 05 の {151} については出度数を照合しているが、No. 02 の {356} と No. 03

<sup>4</sup> このことについては吉池 2011b で述べた。

の{246}とNo. 05の{53}については出度数の照合がないまま契丹原字の音価が付されている。出度数の照合がないという状況をどのように理解するかということであるが、わたしは次のように考えている。すなわち中世蒙古語資料や契丹文における音節の詞頭・詞中・詞尾・単独の出度数やその合計数の照合は、音価推定の重要な情報には違いないがそれは決定的なものではなく、意味が解明されている契丹文の語彙と中世蒙古語との比較や、契丹文と漢字音訳契丹語との比較という対音資料が大きな役割を果たしたということである。もっともこのことは吉池 2011a でも述べたことでもある。

なお今問題としている契丹原字音価表には43の契丹原字に音価が付されており、公刊された『慶陵』の「接尾語表」では24の契丹原字に音価が付されている。契丹原字音価表は語幹と接尾語の区別なく納めたものであり、「接尾語表」は接尾語のみ扱ったものであるから後者の数が少ないのは当然のこととして、興味深い記述が『慶陵』の上巻にある。

現在われわれの推定している原字の音價の詳細は、さらに今後の検討と研究をかさねた上で発表することにしたい。(265頁)

ここで「現在われわれの推定している原字の音價」と述べるものうち、接尾語に係わる原字の音価は「接尾語表」において公表されたわけであるが、それ以外についてはどのようなものであったか不明であった。その不明であった推定音価は、今回紹介した契丹原字音価表に含まれている音価とみて大過ないであろう。もっとも、契丹原字出度表と契丹原字音価表と『慶陵』「接尾語表」の三者の音価の間には異なる部分がある。この点については稿を改めて検討する。

〈参考文献(発行年順)〉

長田夏樹 1951. 「契丹文字解讀の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて一」, 『神戸外大論叢』第2巻第4号, 40-66頁。

田村實造・小林行雄 1952-53. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊、下巻圖版冊)京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は1953年、下巻は1952年発行。

小林行雄・山崎忠・長田夏樹 1953. 「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」, 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』(上巻本文冊)田村實造・小林行雄著, 京都大學文學部 座右寶刊行会。

清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社。

長田夏樹 1994. 「契丹文字の結んだ縁」, 『小林行雄先生追悼録』京都大学文学部考古学研究室編, 天山舎発行, 96-98頁。『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011, 264-265

頁, 好文出版)に収録。

長田夏樹 2001. 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文積・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』 京都: ナカニシヤ出版。

長田夏樹先生追悼集刊行会(長田礼子 長田俊樹 遠藤光暁 竹越孝 太田斎 橋本貴子)編 2011. 『長田夏樹先生追悼集』 東京: 好文出版。

長田礼子 2011. 「長田夏樹年譜」, 『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011. 好文出版), 343-360 頁。

吉池孝一 2011a. 「『慶陵』の契丹文字接尾語表について」, 『KOTONOHA 百号記念論集』(古代文字資料館) 単刊第 5, 90-107 頁。

吉池孝一 2011b. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど —契丹原字出度表—」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館) 第 103 号, 9-19 頁。